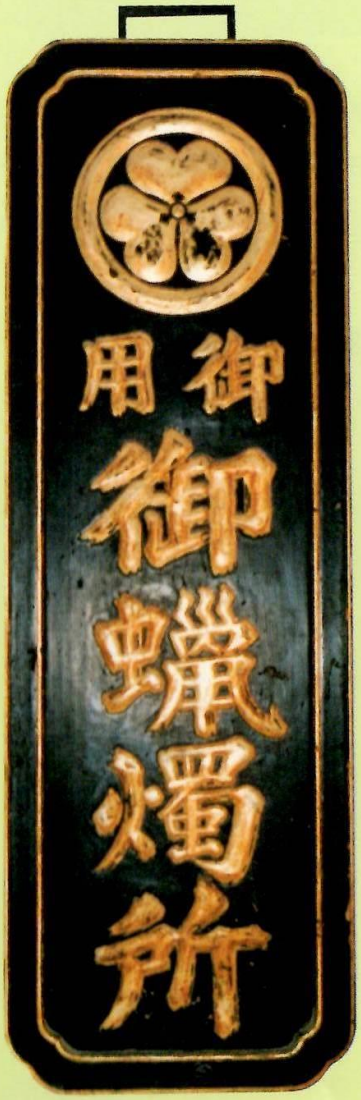
第43回 むかしの看板



御用御蠟燭所

市立資料館蔵

■1階／城輪柵跡展

商家のしるし

■開催期間／1987年２月25日～４月12日

■開館時間／９時30分～16時30分

■休 館 日／月曜日・祝日

■入 館 料／大人100円・児童生徒50円

酒田市立資料館

酒田市一番町８－16 TEL(0234) 24－6544

看　板

商家や商人が、売品・職業・屋号などを表示するため屋外や店さきに出した広告用の作り物。わが国の看板は天長10年(833) 撰進の『令義解』により、奈良平城京の東西両市で各肆（店）ごとに標（しるし）を立て、行名（商品名）を記したのが最初といわれているが、実用的な看板が現れたのは室町時代の中期頃からである。戦国時代も終り平和な桃山時代になると、商売の発達とともに急速に需要がふえ、江戸時代には金銀箔や華美な彫刻をほどこした看板まで現れた。幕府は天和２年（1682）以来、たびたび禁令を出し、看板は木地に墨書し、金具は銅製に限ると取締っている。城下町・三都の店舗商業が発達するに伴い、看板は最も有力な宣伝手段として様々な工夫がこらされるようになった。

看板には、

(一)文字看板　木板に文字を書いた最も古く一般的なもの。一流書家の筆を誇るものがある。

(二)行燈看板　店先に設置し夜に明りを入れる形式。旅館・待合・茶屋・飯屋によく用いられた。

(三)幟（のぼり）看板　布に文字を染め抜き、寄席や特別な売出しなどで使われた。行商人の背負い荷につける小型化したものもある。次に品物・絵画、または文字との組合せで広告の表現をしたものもある。

(四)商品実物看板　麻芋屋・笠屋・鏡屋など。

(五)商品容器実物看板　薬袋・味噌瓶・茶壺など。

(六)　模型看板　扇・足袋・巾着・きせる・下駄など商品の形を模した板に、文字・絵、彫刻をほどこしたものである。

(七)　縁物看板　酒に火を入れるのに杉灰を用いる縁で、杉葉を丸く束ねて酒屋を示し、紅葉に牡丹が画材の縁で鹿肉を示す類。

(八)判じ物看板　弓矢の絵で湯屋、十三里と書いて九里四里（くりより）うまいと解き焼芋屋、将棋の駒型の板が入れば金になると解き質屋を示す、などがある。

以上の看板は、また別に設置場所により屋根看板・軒看板・置看板・立看板などに分けられる。

明治になると、横長のトタン板にペンキ塗の文字看板を店舗入口の上部に掲げることが一般となった。大正期には色電球が使われ、最近では蛍光燈・ネオンサインが加わって、動く看板などができた。しかし、広告・宣伝媒体や方法が多彩となり、建物が高層化する一方、ビル内・地下街の小売店舗が増大するにつれ、看板の効果は薄くなり、小型化しつつある。

〈参考文献〉日本風俗史事典・国史大辞典

竹内　丑松（たけのうちうしまつ）

昭和22年71歳没。恒孝・淇州・子哉・有斐軒・虚心庵。素封家。竹内伊蔵の長男として酒田米屋町で誕生する。若いころから書および漢詩を修め、祖父伊右衛門（為松）以来の天分を発揮して将棋に秀でた。名人関根金次郎と親交を深め、大正７年（1918）井上義雄８段を破って８段に進む。このほか趣味甚だ広く、政治・文学・囲碁・剣道および投網にまでおよび、明治37年（1904）から酒田町会議員20年余、雑誌「木鐸」の発行に関係して論陣を張り、囲碁を通じて頭山満、国分青厓、古島一雄らと交わるなど、囲碁県下第一番の腕と評された。たびたび有名棋士を自宅に招いたほか夏季には屋敷内に道場を設け、名剣士高野佐三郎、菅原融らを招聘して剣道の振興につとめた。姓古くは「たけのうち」と称したが、のち「たけうち」で通用する。〈新編　庄内人名辞典より〉

巌谷　一六（いわやいちろく）

明治38年72歳没。明治時代の書家。名は修、字は誠卿・古梅、号は一六居士・迂堂・金粟・嗡霞楼・呑沢。天保５年近江水口町

に生まる。父は水口藩医玄通で幼時に死別し、母と出京して書を安見氏、漢学を皆川西園、医を三角東園に学び、21歳で帰藩して父の職を嗣いだ。明治維新前、勤王家として大和義挙の志士藤本鉄石・松本奎堂らと親交し、三条実美に接近した。維新後は徴士・議政官史官・太政官内史となり当時の詔勅・制令の浄書を執筆した。のち内閣書記官・元老院議官・錦鶏間祇候・貴族院議員を歴任した。書は菱湖流に出発し、のち楊守敬の来日を機に一変して堅勁酒脱の書風をもって一六流をなした。日下部鳴鶴と並び明治時代の書名をうたわれる。　〈国語大辞典より〉

須田　古竜（すだこりゅう）

昭和20年80歳没。文太郎・子化・皎仙史。漢学者。酒田本町の漢方医須田文栄の次男。幼少のころから学問を好んで、飽海郡立酒田中学校に在学中教師成富一郎の手ほどきで漢詩を作る。以来勉学に励んで斯界一流の人びとと詩文の贈答を重ね、のちには佐賀の人佐田白芋から指導をうけた。古竜がまとめたものの特色として文は四書五経にもとづいて諸子百家にわたり、詩は開元以上を宗としたが、中、晩、南北の両宋におよんだ。母の婦美の生家が庄内松山で清河八郎と縁があったことから八郎の事蹟調査に心血を注ぎ、生涯漬貧に甘んじたが、この間富豪本間家等から経済的援助をうけたといわれる。門人には伊東知也（支那浪人）、佐藤良次（文人）、竹内丑松（将棋８段）、最上谷直吉（事業家）、小山松勝一郎（郷土史家）らの知名人が多い。〈新編　庄内人名辞典より〉

本多　芳寿（ほんだほうじゅ）

昭和14年53歳没。僧呂。酒田寺町本慶寺住職本多澄雲の子。琢成小学校卒業後京都の大谷中学校を経て立命館大学に学んだが、中途退学して岡本椿所について篆刻を学ぶ。のち東京巣鴨に居住、松本幸四郎、尾上梅幸、市川団十郎ら歌舞伎俳優と交友してその印章を彫った。その後、父の死によって酒田に帰り、跡を継いで本慶寺18世住職となる。護法団を組織し、説法・盆踊り・舞踊等を通して部落解放運動に力を尽した。また求めに応じて木額・看板などを彫ったという。　〈新編　庄内人名辞典より〉